

方向

第二三八号 一九九一年一月一七日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人・大塚五朗 (二九) 1991.10.20 原田憲雄

日 米 戦 う

一九四一年(つづき) 五朗、四十四歳。

『水鏡』昭和十七年一月号。

日 蝕 の 庭

仄々(ほのぼの)と日はかけそむるやさしさや動かぬ影を地における木々 (庭六 法金剛院五首・花野)

※『花野』は一艸舎同行自選歌集で「昭和十八年五月二十五日発行」。この集については後に述べる。

食尽のほのあかるさに身を置へおくや太古に通ふもののはるけさ (庭七 花野・続風土三三)

法 金 剛 院

み仏の鼻の低きをふといひておろそかならぬ親しさにゐる (庭八 鞍馬寺四首・続風土三六七)

まみ細くいませばむしろさびしくてみ仏は萩の庭に向かする (庭九 鞍馬寺四首・続風土三六七)

山をへだてて櫻鳥の鳴きを聞きしかどその儘寒く日の昏るる谷 (庭十 鞍馬寺四首・続風土三六七)

午後すでに冷えたつもの通ひ来て眉ちかちかと低き山あり (庭十一 花野)

山の上にある空なればかなしさのたゆる時なく雲ををらしむ
(〃〃〃〃) 花野・続風土二六七

萩の花盛りすぎたる寺庭は風巾しろくたそがれて来ぬ
(〃七 法金剛院・続風土二三)

おほよそに庭は暮れたる一とこら騒(さは)だちて風を寄らしむる池(〃七) 〃・花野・〃〃)

ここに『水鏡』には見えず、『続京都風土記』三三二頁に「日蝕の庭」の題下に収める次の二首を記しておく。

かすかなる松風の音も通ひ来てこの石庭の石冷えにけり
(庭三 龍安寺石庭三首)

それぞれの鬨もちて石は寂(しづ)かなり低き築地を越して日のさす
(〃三 〃)

『水鏡』昭和十七年二月号。

日 米 遂 に 戦 う

勝たねばならぬ決意は口を結ばしむわが前にして燃ゆる子の顔

かかる日のわが生(よ)にありし畏みて朝戸出遼(ふか)き日にむかひゆく
(続風土五)

たはやすくわが聞く(いふ)敵艦轟沈も惜しき命のいくつかかりし
(〃 〃)

顔竝(な)めて親子が物を喰ふことの今日もありつつ国は戦ふ
(〃 七)

国四方に與らむ時を生まれ来てきほへる見れば子はすがしけれ
(〃 二二)

『続京都風土記』平二に収め『水鏡』に見えない作品。

涙たり双手さしあげ言(こと)なさぬ言いひてわれやラジオの前に

南(へみんなみ)の空燃ゆるとふ日を居りて今日幾度をぬぐふ涙ぞ

かへり来て先づはひと日の恙なしなづなの粥をふきつつぞ喰ふ

夜の空のやみ美しく身を刺せり管制二日目の街かへり来る

生きて再びかへらぬのせて海ゆくや特殊潜航艇の文字が目にしむ

機もろとも布哇の空に爆(は)ぜ散りし壮烈さはけだし思索を越ゆる

霜の夜をラジオきびしく告ぐるらく我軍一機いまだかへらず

国明るく成長(そだ)ちゆく代を思ほへばあやまちてわれ早く生まれし

一九四二年 五朗、四十五歳。勤務先、住所同じ。松子、四十四歳。朗、二十二歳。喜子、十八歳。樹、十四歳。

哲、十一歳。迪子、八歳。

一月二十七日に、『艸』第三号が、京都市上京区大將軍坂田町大塚方一艸舎から、発行された。「今同行諸君の手に送る『艸』三号は一艸舎最初の記念塔である。之を礎いて我々の半ばは發生の地を去るが、半ばはかたこの苑を守つて進む」と後書きにいうように、杉田荘作・田中千美はすでに東京に去り、柴野純・高田益雄・原田憲雄は二月一日の入営が決定しており、その他の者も、いつ召集や動員がかかるかもしれない状態であった。

一粒の種が風に運ばれて来て地に落ちた。やがてそこから一本の草が青い芽を出した。この偶然に宿された必然を考えてみなければならぬ。運命論者はこれを宿命と呼び、天意といふ。しかし現実には動かすことの出来ない現実である。あるがままの世界があるがままに見るべく養はれて来た私達は、そこに誠を発見し、具象の尊さを知る。強ひて天意をいはんとすれば、この誠は天に通ずる大道である。一本の草によつて天に

つながる歌らかな意志である。

一本の草を育てるのも誠であれば、誠の具相は亦一本の草である。私達は風にそよぐ一本の草を前にして、私達の真実を語り、心の清らかさをあたため、更に生き合ふことの愉しさを育くむべきであらう。

これが五朗の「扉」の言葉。水廻同人の光田作治が「大塚五朗氏の近業に就いて」を寄せ、以下同行の作品。

「嵯峨(短歌)」大塚五朗、「構え(評論)」柴野純、「語感について(評論)」田中千美、「夢殿救世観音(短歌)」森田曠平、「墓標(短歌)」木本美津子、「松の内(短歌)」浪江富佐子、「青潮—紀州大崎に遊ぶ—(随筆)」大塚五朗、「餅談義(随筆)」赤谷明海、「赤い影と青い影(随筆)」杉田荘作、「切符を買ふまで(随筆)」川見すみ子、「発表せぬ歌と没書されし歌(短歌)」平二郎、「日々(短歌)」原田憲雄、「ベッティさん(随筆)」岡本和氣、「読書折々(随筆)」宮崎篤三郎、「或る関心(小説)」高田益雄、「鶏と卵(随筆)」平野謙三、「丹波(随筆)」大塚五朗、「元旦(随筆)」勝見ふみ子。

五朗の「嵯峨」を引いておこう。

峡ゆくと物のひびきは身に近し時雨ぐもりの日は低くして

尿して何かはかなき身の寒さ竹深閑とわが前にある

咲きそめし茶の花がある徑にして吹く風細き中に人ゆく

人のいふ言も身にしむ寒さにて峡より峯にうつる日のかげ

ひよろひよろの椎がこぼせる露さむく去来の墓は冬やせてます()

(『水廻』四月号参照)

『水鏡』昭和十七年三月号。

身辺即事

遂にして老到りしかあらがはぬ静けさにして妻は牙える

子にかまけ終る一生(よ)を牙々と自恃(ほこ)るに似たりあらがはぬ妻

(庭二〇五)

息をひく即ちも来て看護婦は死体消毒をばたばた始めぬ

(〃〃 甥の死三首・花野)

型のごとく悔みをいひて医者去りぬ朝日は死者の顔に及びつ

(〃一〇六〃〃)

その父の軽くなりしを持たしめてまひる紅葉の山を下りぬ

(〃〃〃〃)

『水鏡』四月号。

冬情

水やせて山の上にある池ひくしその上にうつる樹々の音なき

(庭六 鞍馬寺・統風土三三 嵯峨野・花野)

映ゆくと物のひびきは身に近し時雨ぐもりの日は低くして

竹やぶをぬけて条(すぢ)だつ風尻の即ち散らす崖の紅葉を

ひよろひよろの椎がこぼせる露寒く去来の墓は冬やせてます (〃六)

〃〃〃〃

明るくて住まひにくげの墓ながら朝夕(あさよ)は椎の露しげからし

(〃〃〃〃・花野)

生命(いのち)ただに国にまむかふたかぶりの夜半に幾度我を醒ましむ

『水鏡』五月号。

冬情

何気なく銀杏の黄なる詠みたりし癡者の歌に一日かかはる (庭二〇六)

晴れて青き朝の空より散る雪の竹の葉にして浅く積みたる (花野)

今年寒く花に間のある沈丁を床に置かせてわが目やすらふ

夕焼がやがて夜となる寒さにて一ひらの雲を比叡は寄らしむ (〃)

子を連れて昼の映画を見ることも寛ぎ易き老を恥(やさ)しむ (庭二〇六)

『水鏡』六月号。

憲雄の入営

大東亜淨むる火とぞシンガポール燃落ちし時の歴史は書かむ

一筋に結ぶ生命ぞたはやすく絶ゆる日ありとわが思はなくに

うつうつに思へば頭ち来安土野や君と相みし河骨の花

(庭二〇七 吉井勇先生二首)

酒のまぬ聖(ひじり)となりて詠ます歌君は宣(の)らさねさぶしくし見ゆ (〃) 〃・水鏡なし)

冬の芽のすでにほぐる構(かまへ)にて接骨木(にはとこ)の枝は揺(ゆ)れやすきかも (庭六九)

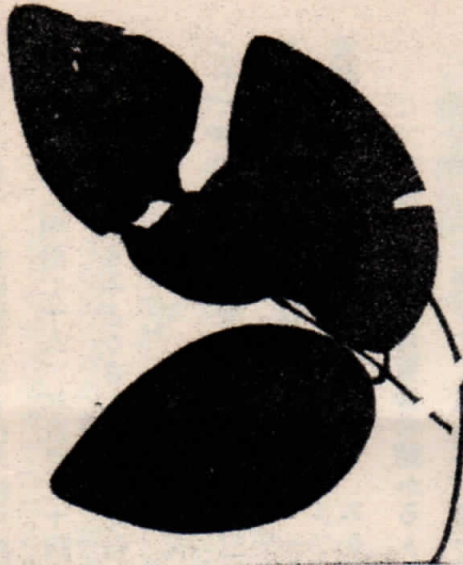
接骨木の芽はほころぶと冬庭の一隅にしてゆるる夕光 (花野)

四月、五朗は、京都府立京都第三中学校の教諭から、新設の京都府立嵯峨野高等女学校の教諭に転任した。教頭職だったようである。

銀閣寺の萩 — 春夢女史周辺 九 — 1916.14 原田憲雄

一八九四（明治二十七年）十一月九日、中野道遥は帰郷する友のために小宴を設け、そののち発熱、十三日、山龍堂に入院、十六日死亡、十八日密葬、谷中の墓地に遺体を収め、十二月四日、故郷宇和島の光国寺で本葬が営まれた、という。道遥が「春夢」と称した坪井女史を、これからはその本名「すむ」でよぶことにしよう。

さてすむの遺品のなかに「明治廿八年七月十二日 銀閣寺の萩 坪井」と表書し上質の半紙に包んだ萩の葉の押し花がある。田中みどりさんが示されたとき、前年の同じころ京都に立ちよった道遥を偲んで上洛したしるしと思った。だが、ここにも別の事情がからんでいた。



明治廿八年七月十二日

銀閣寺の萩

坪井

瀧口みか子と安田磐子がすむの桜井女学校・女子学院を通じての親友であることは前に触れた。その磐子がこの一八九五（明治二十八）年八月二十四日、急死し、翌年十月、みか子の編集で追悼文集『阿蘇のけふり』が刊行された。これもみどりさんから教えられ、通読して、事情を知った。

磐子は、一八七一年、熊本に生れ、父の任地、東京・名古屋で学校や塾で文武の教育をうけ、一八八七（明治二十）年、桜井女学校に入り、一八九三年六月、女子学院高等全科を卒業、保母の学科も同時に卒業し、九月、新潟県私立高田女学校の教師となり、一八九五年七月、同僚や教え子たちに惜しまれながら辞職し、東京にゆき、故郷へ帰ってまもなくの死である。みか子の追悼文によれば、その年の春、磐子がみか子に宛てた手紙に、

……此度は西京に博覧会の開かるゝことゝて、名所見物かたゞゞ坪井姉にも御目にかゝりたく、出来得べくば京都に共に遊びたく望み候、万一□□遊ぶこと叶はずとも、京都までは是非とも御同車□□□□候、されば夏休みには、富士をながめつゝ、おもしろき東海道の旅話をも、楽しく語らんと、今より楽しみ居候……ところが、七月になって磐子に差し支えができ、東京からまっすぐに熊本に帰り、みか子はひとり京都にゆき、すむと遊んだのであった。後に引く追悼文から察すると、すむはそのころ京都に住んでいたらしい。新宮市立図書館所蔵の坪井仙次郎編『和歌山県地理史談』の奥付には明治二十八年三月初版、七月訂正再版とあり、著者の住所は「京都市下京区堺町通蛸薬師下ル菊屋町壱番戸寄留」とする。女史はそこに世話になっていたのであろう。もっとも前のとし一八九四年七月に、道邊が京都で女史の兄の春児に会ったことをすむ宛て手紙で言っていた。春児がその後も京都にいとすれば仙次郎宅以外に下宿し、女史もその下宿に住んだかもしれぬ。

『阿蘇のけふり』に収めるすむの追悼の詩と文を次にかかげよう。

亡き友をしのふ夕ぐれに虫の音をきゝて

坪井すむ子

遠山でらのかねの音は、いと淋しくも響きつゝ／待つにかひなき其友を／むかしを忍ぶ夕まぐれ／露けき野
辺の草かげに／あはれをうたふ虫の声。

いは子の君の亡りたまひしを悲しみて

朝の花は風に散り、夕の月は雲に隠る、つれなき憂き世にしばし仮寝する人の命ばかりはかなきものはあらじ、あだし野の露きえやすく、鳥部野の烟立たぬひまなしとかや、わが友いは子の君は、かゝる世に住みわびて、八月の程、無常の風にさそはれて、ゆくりなくも帰らぬ旅路にたどり入りたまひぬ、数ふれば四とせの昔、涙と共に別れしより、風につけ雨につけ、ひとり淋しきやどにかた時も忘るゝひまなく、悲しきこと癒しきことなど、文にかよはせて共に語らひけるも、何となくものたらぬ心地しぬ、あはれ今一たび相逢ふ折のあれかしと、打ち念せしかひありてか、我身今年都にもうのほりければ、この折にこそと頼みしに、よどみにうかぶうたかたの、あとなく消えて、今この悲しきことにあふ、くやしともくやし、君はひとり子にませば、花と眺め玉とめで、世にまたとなくかしづき給ひし父母君の、御心のうちはいかに、思ひまつるも胸せまりて、葉末における露よりもしげきはわが袖の涙にこそ、せめては朝な夕な、おくつき所に詣で、塵を払ひ草をぬき、とはに色かはらぬしきびに、我心をこめて、手向けまゐらせんと思へど、君がおくづきところは、遠き熊本にあれば、これもかなはぬことなりけり、

あはれいは子の君よ、今日は人の上と思ひしも、明日は我身の上となる飛鳥川淵瀬さだめぬはかなの世に、いつまでもかくてぞあるべき、やがて我身も君のあとを慕ひゆきて、つもる物語りもせん、君がつねに好みたまひし歌も共にうたはん、その時までしばし忍びて待ちたまへわが身はひとり残されて、故郷遠く旅ねする草枕、夜半の風いと寒く、うつゝにも夢にも、君のおもかげ見えぬ日はなく、はかなきことかきつゞくれば限りもなし、あはれなつかしき友よ、あはれこひしき友よ、

我のみをいかにせよとて君独帰らぬ旅に門出しにけむ

霜月三日の夜南の窓にて 坪井すむ子 しるす

この年、女史には事が多かった。十月二十日発行の『菁莪』第五号に和歌「山家月」一首を発表した。

山里は妻とふ鹿の声さえてあはれぞまさる秋の夜の月

その投稿は七月か八月であろう。銀閣寺で萩を手折ったのといずれが前だったか。次の月の『菁莪』第六号に、軒ちかき松の嵐に世の中のうきこと払う山の下いほ

山家

尾花ちる野辺の秋風身にしみてかりなき渡る夕暮の空

暮天雁

ときはなる枝にも風の渡れるは花の姿のあればなりけり

常盤御前

この投稿は八月か九月。ひょっとしたら常盤御前に安田磐子の面影をこめているかもしれない。この号に女史の文「徐福の墓」も載っていた。次の月の『菁莪』第七号に、

古里のやとの垣根はあれはてて虫の音のみぞあるじかほなる

古里虫

花かくも雲かゆきかたまがふまでをちの山辺にはつ雪の降る
初雪

きのふまであだにせし日の惜しまれてとしの名残となりけるかな
惜年

の三首と「所感」という文が掲載される。この投稿が九月か十月。そして十一月三日、安田磐子のために追悼の文を綴ったのである。この月の十六日は中野逍遙の一周忌で、『逍遙遺稿』が刊行された。二十日ころまでにはすむも手にしていたであろう。二十五日、叔父の印東玄得が死去した。四十六歳であった。

翌年一月発行の『菁莪』第八号に女史の歌文が見えないのは、十月から十一月にかけて多事だったからであろう。その年三月発行の第九号に三首の和歌と「蜘蛛」という文をかかげる。前年十二月かこの年の一月の投稿であり、以後、寄稿していないのは、さきに推測したように、教員として就職したことによるのであろう。

この約一年の女史の動静を見ると、逍遙に対する心の動きは定かでなく、追悼という点では安田磐子へのそれがいちじるしい。同性の親友だから自然ではあるが、「徐福の墓」で逍遙の存在を隠したように、他の歌文にもかれに対する感情が、こめられていない、とは言い得まい。

銀閣寺の萩は、親友の瀧口みか子と共にした、同時に安田磐子と共にしえなかった、行楽の記念ではあろうが、その前年の同じ時期に逍遙が歩いたであろう道をたどりなおす願いが秘められていた、とも考えられよう。一八九五年十二月十七日に「あはれなる少女」が、そしてたぶんその後「誰が罪」が書かれ、他に発表することなくすむの筐底におさめられていたことが、この推測を支えるように感ぜられるのだが、いかがであらうか。

あはれなる少女

明治二十八年十二月十七日夜　いと淋しき折

騒々しき町を離れ人の往来も稀なると閑静なる辺に高く聳ゆるは某女学校の寄宿舎なりけり

今しも時計は十時をつけ学びの少女等は一日の業に勞れはてて早や夢路をたどらん窓もれくる燈火の光もほの暗く落葉を吹き捲く木枯の音のみ物淋しきに独り文机によりて亡母のかたみともおほしき古き文庫の中よりなつかしげに取り出ししふみを少し読みてしばしためらひ又読みさしては長き息をつきはてはそを顔におしあてよよと泣くは年の頃二十余りの手弱女なりまだ散り果てぬ花の色に柳の眉のいとうるわしく鄙にはをしきほどのながめながらかくまでひとり胸を痛むるは如何なる深き故よしやあるならむ

手弱女は堪えがたき思を語らはん人なければ窓もる月に独ごちぬ

満れば欠け栄ゆれば衰ふ有為転変の世にありて安楽をのみ望むにはあらねど世の斯くまで我身につれなきは如何なる宿世にか思へば十とせの昔都なる学の家にありし頃は世の憂事悲しき事は露知らず焼野の雉子夜の鶴たが親も子を思ふ心は変らねど我身は男子四人の中の女一人なりければ父母君のいつくしみ一かたならず春は上野の花にあこがれ秋は隅田の月に棹さしさては龜井戸の藤浅草の観音よと折につけては我身をつれゆき給ひぬげに楽しうれしと暮らししも暫時の夢の間にて我十四の頃よりは悲しきことのみ打続き今はなつかしき祖母君恋しき母君に残され親しき友にも去られて又年老いたる父君にさへ別れて海山遠き旅の身は思はじとおもへど悲しまじとすれどいかでか弱き心の堪へらるべきまして涙も氷るばかりの寒き冬の夜は隙もり風もいとど身にしみてはいも寝

られぬままに昔の文どもうち見るに亡人々のおもかげ忍ばれて胸も裂くるばかり心の苦しきやらんかたなし

あはれ祖母君よ母君よあくまで慕ふ我身を独り此世に残しおきていつこへか行き給ひしをかすと常にいひ給ひし丸々と肥りたる顔も桃色の頬も今はやつれて色さへ褪せぬるをあはれとも見たまはずや

又去年の秋武蔵野の月にあこがれて帰らぬ旅に趣き給ひし兄君とも又まことある友とも頼み参らせし君に告げまつりたきはわが心のほどなり世に頼み少なき身を哀と見給ひてや月頃日ごろ学窓のうさを慰め給はり何くれとなくと懇ろになべての事に力を添へ給ひしにわが身が余りわかしくかつは足らはぬ心もて常につれなくのみうち過ごしし罪のほどゆるし給へ今より思へば御心づくしのうれしく身のをこないし事のいと恥かしうてなん

世の人の心は氷よりもつめたきにこの後は誰をかたのまむこし方行末の事ども思ひつづくれれば限りもなく徒に夜のみ更けぬ今は何事も思はじ世の人々に捨てられて一生埋木の身と朽ちはつるも何をか恨まむ

かくは思ひすてし身も時来たらば都の春にも逢ふ時もやあらむ只々己が志す道をはげみつつ身の行末は流るる水の心にまかせん

手弱女はかくあきらめつ先の文をば庫へ文庫へに蔵めし折は夜もいたくふけ月も山の端に傾きぬ今は火桶の火もつき寒き袖に涙はぬぐへども尚いねもやらで物思ふはさすがにもゆる思ひの消えがたきにや心も姿もやさしきものを人に知られず寒も結ばであたら嵐に散らす口惜しさよ同じ年はなる我身の上ともおもはれて一しほあはれにきこえしまま燈火かきたててかくは記しぬ

4-23. 「二倍の賃金をおまえにやろう。それに、足に塗る油も、二倍だ。

塩のはいった食べ物もやろう。野菜や、シャツも、おまけにだ」(26)
いったんあんなに叱りつけ、賢い長者は、しかしまたかれを馴れさせる。

「ここではなかなか仕事をしているな。おまえはきっとおれの息子だ、間違いない」と。(27)
そしてすこしずつ家に入りし、その男に仕事をさせ、

満二十年のあいだに、次第に、信頼させるようにする、その男に。(28)

黄金・真珠・玻璃が、その屋敷に貯えられているが、

そのすべてを計算し、すべての財産を管理させる。(29)

だが、その屋敷の外の小屋に一人で住み、あの愚か者は、

貧しいのだと思い込んでいる「じぶんにはこんな財産は何一つない」と。(30)

長者は、かれのこんな様子を知り、「わたしの息子はすぐれた考え方をするようになった。

友人や親族を招き集めて、わたしはすべての財産を譲り渡そう」(31)

王たち、村の人々、町の人々、またたくさん商人達を招いて、

大衆のなかで、こういった「これはわたしの息子、長いあいだ失踪していたのです。(32)

満五十年も。さらに二十年です、わたしがめぐりあうてから。

それがしの町でいなくなり、わたしも捜しながら、こうしてここに来たのです。(33)

私のすべての財産はこれのもの、いっさい残らず譲ります。

父の財産で仕事をするがいい、家の使用人たちもみなやるから」(34)

あの男は未曾有のことと思うだろう、さきの貧しい状態を思い起こして、
「小さな願いしか持たないのに、家の全財産を手に入れて、いまは安楽だ」と。(35)

同様に、われらの導師は、願いの小さいことを知っておられたから、

聞かされなかった「仏になるだろう、あなたがた声聞は、確かにわたしの息子だ」などと。(36)

世界の導師は勧められる「無上の菩提にむかって旅立つ、

かれらに説きなさい、カーンチャパよ、最高の道、修めて仏となる道を」(37)

われわれはスガタによって遣わされた、多くの有能なボサツたちのもとへ。

そこでわれらは無上の道を説いたのだ、幾千万、幾百万の譬喩や因縁によって。(38)

われわれの言葉をきいて、スガタの子らは、菩提にいたる無上の道を修行する。

かれらはその利那に授記される「この世界で仏になるだろう」と。(39)

このような仕事をわれらは救世者のためにする、この教法の蔵をまもりながら、

ツナの子らに説き明かして、ちょうどあの信頼された男のように。(40)

わたしたちは、貧しい者だと思い込んで、仏の蔵を分かち与えながら

ジナの智慧を求めようとはしなかつた、ジナの智慧を説き明かすために。(41)

われらみずから解脱に達したと思つたが、その智慧はこんなもの、そこから出なかつた。

わたしたちに歡喜の起こることはかつてなかつた、仏の国土の輝かしさを聞かされても。(42)

dvi-guṇam ca te velanakaṃ dadāmi dvi-guṇam ca bhūyas tatha pāda-mrakaṣaṇam /

saloṇa-bhaktam ca dadāmi tubhya śakam ca śātim (W: śātim) ca punar dadāmi //26//

evam ca tam dhartsayi (W: dhartsiyā) tasmī kālē samślesayet tam punar eva paṇḍitah /

susṭhūm khalu (W: khalū) karma karosi atra pultrō 'si vyaktam mama nātra samśayah //27//

sa stoka-stokam ca gṛham praveśayet karmam ca karāpāyī tam manusyaṃ /

viśāś ca varsāṇi supūritāni kramaṇa viśrambhayī tam naram sah //28//

hiraṇyu so muktiku sphāṭikam ca pratīśāmayit (W: pratīśāmayet) tatra niveśanasmin /

sarvaṃ ca so saṃśaṇaṇam karoti artham ca sarvaṃ anucintayeta //29//

bāhardha (W: bahirdha) so lasya niveśanasya kutikāya eko vasamānu bālāh /

daridra-cintām anucintayeta na me 'sti etādṛśa bhogu ke-cit //30//

jñātvā ca so lasya im-eva-rūpaṃ udāra-saṃjñā bhigato mi putrah /

sa ānavitvā suhr-jñāti-saṃgham niryatayisyāmy ahu sarvaṃ artham //31//

rājāna so naiḡama-nāgarāṃś ca samānavitvā bahu-vāṇijāṃś ca /
 evaṃ uvāca (W:uvāca evaṃ) pariśāya madhye putro mamāyaṃ cira vipraṇastakāḥ //32//
 pañcāśa varāṇi supūrṇakāṇi anye c'ato vimśatiye mi dṛṣṭāḥ /
 amukātu nagarātu mamaiśa nasto śhaṃ ca mārgante ihaivaṃ āgataḥ //33//
 sarvaśya dravyaśya ayaṃ prabhur me eśaśya niryātayi sarva śeśataḥ /
 karotu kāryaṃ ca pitur dhanena sarvaṃ kuṭumbam ca dadāmi etat //34//
 āścarya-prāptāś ca bhaven naro 'sau daridra-bhāvaṃ purimaṃ smaritvā /
 hīnādhimuktim ca pituś ca tān guṇāṃl labdhvā kuṭumbam sukhito 'smi adya //35//
 tathaiva caśmāka vināyakena hīnādhimuklitva vijāniyāna /
 na śrāvitam buddha bhaviśyatheti yūyaṃ kila śrāvaka mahya putrāḥ //36//
 aśmāṃś ca adhyeśati loka-nātho ye praśthitā uttamam agra-bodhim /
 teśāṃ vade kāśyapa mārga 'nutlaraṃ yaṃ mārga bhāvitva bhavyu buddhāḥ //37//
 vayaṃ ca teśāṃ sugatena preśitā bahu-bodhiśatlvāna mahā-balānāṃ /
 anutlaraṃ mārga pradarśayāma dṛṣṭanta-hetu-nayutāna koṭibhiḥ //38//
 śrutvā ca aśmāka (W:āśmāku) jinaśya putrā bodhāya bhāventi sumārgam agraṃ /
 te vyākriyante ca kṣaṇaśmi tasmin bhaviśyethā buddha imāśmi loka //39//

etādrśam karma karoma tāyineḥ samrakṣamānā ima dharmā-kośam /
prakāśayanlāś ca jin ātma-jānām vaiśvāsikes tasya yathā narah sah //40//
daridra-cintās ca vicintayāma viśrāṇayanto ima (W:imu) buddha-kośam (W:ghosan) /
na caiva prārthe ma (W:mu) jinasya jānām jinasya jānām ca prakāśayamāḥ //41//
pratyalmikim nirvrti kalpayama etāvata jānīm idam na bhūyah /
nasmāka harso pi kadā-ci bhōti ksetresu buddhāna śruṇitva vyūhān //42//

※前号正誤 二三頁 五行 マハーブラジャーパティー ↓ マハーブラジャーパティー

廬山諸道人 (中国の詩人と仏教 一七) 1991.10.18 原田憲雄

柳宗元の「永州八記」はたいへんすぐれたもので、これが遊記の流行発展のきっかけとなったのは確かです。しかし、褚氏もいうように「遊記のたぐいの文章は、かなり早くからあった」のですから、柳宗元に始まる、というのは妥当ではなく、「かなり早くからあった」ものうち、初めに近いと推測しうるすぐれたものを求めて、そこから「始まる」とするのが「厳密」な言い方でしょう。前回お話しした慧遠の「遊山記」や「廬山記」は、その条件にあてはまるものではないでしょうか。

ところで、慧遠の兩記と前後するものに、廬山諸道人なるひとの「遊石門詩（石門に遊ぶ詩）」とその「序」があります。長いものですが、拙訳を次に掲げておきましょう。

石門は廬山の寺の南十余里にあり、「障山」ともいう。廬山山系中のひとつで、形体は衆峰を凌ぐ。三つの水源がここに始まり、並立する山間を開いて流れ出る。傾く巖は黒くその上に映じ、「自然」への幽玄な関門であることを表現している。だから「石門」を名とするのだ。これは廬山の一隅ながら、実に大地の奇観である。古くから世間でもてはやしはしても、実際は見届けていない者が多い。というのも、瀑流はげしく人や獣の足跡も絶え、径は丘をめぐり、路はけわしく歩行困難なので、経験しがたいからである。

積尊門下の法師であるわたしたちは隆安四年春二月、山水を吟詠しようとし、そこで錫杖をひいて遊山した。ときに同好の僧徒三十余人、ことごとく衣をふるって朝はやく出発し、ずんずん興が湧いてくる。林も谷も幽邃（ゆうすい）だが、道をかきわけて競進し、険しい岩石を踏み越えるにも、みな一緒なら楽しく安心だ。石門に到着すると、木の枝をひき薦かすらをたよりに、けわしい崖をわたり、たがいに手を取りあってや々と頂上に達した。勝景をみはらして巖に寄り、つまびらかに下方を観察して、廬山七嶺の美しさが、ここにいみじくも集中しているのをはじめて知った。

石門は二つの關門（けつもん）のように前に対峙し、重なる巖が後ろに照り映え、峰や丘が周りをとりまいて障壁となり、高い岩が四方をめぐって別天地を開く。その中とはいうと、石台あり、石池あり、宮館の形、動物の姿のものありで、その趣は楽しい。清らの泉が分れて流れ、合わさり注ぎ、みどりの淵は、天然の池

に鏡のように淨らかだ。まだらの石は色どりにおい、きらきらと面をあらわし、かわやなぎや松、花咲く草はもりあがるばかり目にあざやかで、神妙の麗しき、すべて備われり、である。

この日、ひとびとは夢中になり、眺めて飽くことも知らなかったが、さほど遊覽せぬうちに天気はしばしば変わり、霧が塵のように集まれば、万象は姿を隠し、流れる光がめぐり照らせば、衆山は空に影を倒さに映じる。霧がひらける際、測りがたく靈妙な趣があった。そこでまた登ろうとすると、飛翔する鳥が翼をはばたかせ、叫ぶ猿が声をはげしくする。雲が馬車を巡らすように帰ってくると、天人の來迎が想われ、哀怨な獸声とあい和して、玄秘（げんび）の妙楽（みょうがく）を演奏するようだ。ほのかながらも聞こえるように、精神はのびのびし、その楽音は歓楽をめざすものではないが、永い一日を欣喜させた。心を空しくして自得した感想としては、まことに味わい深いものがあるのだけれど、さて表現しようとするとは簡単にはゆかぬ。一歩しりぞいて考えてみよう。

いったい、この險崖幽谷の空間は、たまたまそのすべてに持ち主がない。だから私情をもってこれに対することがないであろう。しかも感興を啓発して人を引きつけ、このように趣ふかい。これは虚空の明るさが人間の觀照を透徹させ、境域のゆかしさが感情を篤実にするからではないであろうか。

このような論議をふたたびみたび重ねたが、なお不分明で説きつくせぬ。ふと気がつくとも太陽は夕暮れを告げ、視界にあったものも見えなくなった。かくして隱者が幽玄の理を觀察するゆえんを悟り、万物の本体に想到することができた。その神秘の趣き、山水に限定されようか。そこで高峰を徘徊し、目を放って四方を

眺めると、九江はあたかも帯、丘陵は蟻塚みたいだ。ここから推論すれば、形に大小があるように、知識もまた同様であろう。されば嘆じていう、宇宙ははるかながら、古今をつらぬいて一理であろう。靈鷲山はあてどなく、荒漠の道は日々に疎隔する。哲人釈尊がおいでにならねば、道風遺跡が残存しても、深い悟りには程遠かろう。わたしは慨然として長くしのび、また同志とともに千載一遇の楽しみを同じくしえたことを喜び、良き時の再びは得難いことを思った。そのような感情が胸中にわき起こり、さてこそ共にこれを吟詠するのである。

超興非本有

超絶の興趣はほんらい存在せぬ、

理感興自生

心理が感じ興趣おのずと生じるのだ。

忽聞石門遊

ふと耳にした 石門山に遊行しようという話、

奇唱発幽情

その提唱にゆかしい気持がそそられる。

褰裳思雲駕

袴の裾をかかげて思ふ天に登る雲の馬車、

望崖想曾城

崖を望んで想像する神山のあの曾城を。

馳歩乘長巖

はや駆けして高い巖を乗りこすとき、

不覺質有輕

思わず体が軽々と仙人のように舞っていた。

矯首登雲闕

頭をあげて雲湧く石門のぼりゆき、

眇若凌太清

はるかに天上の太清宮をしのぐ感じだ。

端居運虚輪

端然と禅坐して虚空の法輪めぐらせば、

転彼玄中經

転々と展開するあの幽玄のうちなる経義。

神仙同物化

神仙といえ万物とともに変化するのだ、

未若両俱冥

かなうまい、自他相對の両端を滅却するには。

さて、この詩文の作者「廬山諸道人」、道人は修行者のことですから、「廬山に居住するもろもろの修行者たち」ということになりましょう。序文でいえば「隆安四年に遊山」する「釈法師」とこれに同行した「同好の僧徒三十余人」です。序文の末尾に「共にこれを吟詠する」といっていますから、三十数人の全部でなくとも、その多くが詩を作ったはずです。掲げた一首を、その多数で合作したとも考えられなくはないが、常識としては、二、三十首の作品ができ、その詩集全体の「序」として先の文が書かれ、序と詩の一首の作者が「釈法師」だった、ということでしょう。そうして、詩集は散逸したが「釈法師」の文集が残ったので、「序」と「詩」の一首だけが遺存したのでしょう。では「釈法師」とは何者でしょうか。わたしは、それが慧遠ではないかと推測するのですが、慧遠その人でなくとも、慧遠に近い人物だったことは疑いをいれませぬ。

遊山の行なわれた隆安四年は四〇〇年で、慧遠は六十七歳、廬山に入ってから十七年目にあたります。このとき、廬山の僧徒は慧遠の弟子ばかりではなく、西域・南海から遠来の異国の法師をはじめ、四方から集った学僧

も多かつたけれども、かれらの精神的指導者・援助者は慧遠だったので。廬山にかぎらず、当時の中国では、異国の法師はインド仏教の知識や実際については慧遠の上に立ち得ても、その知識と實際を中国に伝え、根付かせるためには、慧遠の庇護や支援がなければ困難でした。四〇一年に長安に連れてこられたクマーラジーヴァがインド・西域・中国に名を知られた高僧でありながら、慧遠とねんごろな文通をしていることにも、その消息が伺われます。まして中国人の僧のなかでは、仏教学についても、儒・道二家の学問についても、おまけに詩文の素養においてさえ、慧遠を超える人は、ほとんどありませんでした。そんな慧遠のいる廬山で、三十数人もの僧が一同になって遊山するという話が、かれの耳に入らぬわけはなく、老人とはいえきびしい修行で鍛えた体と意志力をもち、この前後に「廬山記」や「廬山東林雜詩」を作り、後に七十三歳でなお「遊山記」を書いているかれが、そんな計画を聞いて参加しなかったとは、とうてい考えられません。参加した以上、詩もできたろうし、たとえ詩を作らなくても、他の人の作品で詩集ができれば、その序を慧遠に頼んだろうことは、きわめて自然なことです。そのうえ、「石門に遊ぶ詩」とその「序」の語る思想も文体も、慧遠の「廬山記」「廬山東林雜詩」のそれと同じ、といてよいくらい、よく似ています。これらの理由によって、「石門に遊ぶ詩」と「序」の作者を慧遠としてよい、と考えるのです。それではなぜ慧遠が、詩と序に自分の名を署名しなかったのか、といった疑義もでてきます。考えうる理由はありますが、反論の余地のないものではありません。しかし、慧遠の作でなくても、慧遠に近い人だったことは間違いないでしょう。これらが後の世の偽作でない限りは。

さて、「石門に遊ぶ詩」と「序」が慧遠、または慧遠に近い人の作であっても、この文は詩の「序文」であっ

て、「遊記」ではない、といった声が出そうです。後世の煩瑣厳密な分類学の規定に従えばそういうことになりましょうが、なにしろ「遊記」の存在さえ学者の間で未確認の時代の作品の探索中ですから、後世の規範にあてはまらなくても、類似し近似するものにおおまかな様式の系統をさぐる方が、ここでは有効だろうと考えます。

土地空間についての記述は、前回触れたように、『書』や『礼』といった儒教の經典にもすでにあるのですが、文学作品としては班彪(三二)の「北征賦」や班固(三三)の「兩都賦」などが早く、とくに「北征賦」はじぶんの旅行を描いたものですから「遊記」といってよいようなものですが、「賦」は韻を踏んだ美文で、広義の詩に分類すべきものです。これに対して、「遊記」は散文の一樣式なのです。慧遠らの遊記が先立つ賦に学んでいることはいうまでもありませんが、先人の文体を模倣するのではなく、新たに散文で、自分達の見出した新天地を、新しい感性と思想で描きだしたところに、この様式の革新性があるのです。

遊記には、長いのも短いのもあり、客観描写に終始するものがあるかとおもえば、山川の様態に主観をからませて思想の表現に重点をおくものがあります。慧遠と廬山道人の作は合わせて三首にすぎませんが、その三首に、すでに遊記のあらゆる発展形態が萌芽として備わっています。

これだけの要約があれば、慧遠を「遊記」なる様式の創始者としても、さしつかえないではありませんか。

ところで、慧遠らの遊記とほぼ同じ時期に、陶渊明が「桃花源の記」という不思議な文章を書いています。たいへん有名な作品ですから、たいいていの方はご存知でしょうが、これと慧遠らの遊記のあいだにあったであろう関連については、まだどなたも触れておられないようです。次回は、そのことについてお話いたします。